





朱傍去

俊定三の井したりの入



古池轉句解

長崎木村山述

西永丙申如月中二社中十余山並に撰り下徳を  
に令一他傍百約多系作與小禮也取てある  
るなり時小信徳班と出んで日首を夫古池の傍に  
の邊を以て是と稱僕も神をふむる所也  
尋司する小只句句の用佳といふの事傳ふ事いふ  
きふ一書りて文解の編をたのむといふこと  
あるは是と共ふいふ神妙の上と得すなり







しりのまゝに幾も一徑に走らねず出る渾濁しき  
まをなほ深淵に――古松を朽枝とて文へ書く暮  
聲――と母の歌跡くもよみけとくは松平  
梅とて――と水陸の境とらんか池を廣狭と  
つとまじく――朽木の心あはれはたわや外との池  
め横たし葉多きのそぶるの原すふ危し(本境の  
幽室にまきつゝいづるを――す時ふ一葉の陸まで水  
入るあるとあふと一旬さあなる松を求むるふ  
待たし思ひたるふ泪よ造化妙申の心鬼神の物

折ありたさうのひたさうと――と淡筆の筆もあつ事むしが  
るう那謝女、池邊春まよしのむい神物としてまもふ  
感をもとにまよの歌お似たり都て女まよの十二因縁を  
心まよとて行を修め神物とて松をあらと申のなる  
う松ふ三奇（まよ）に子にまよこのお松と探しと田り  
彼地松ふまよを松まよとてあはれとて今あすこいあ  
清裡又曰未教とまよる松くまよ松と印て松  
まよとて松くこまよ松よ再まよ松奥卒のまよ松  
まよ松まよまよ松まよ松まよ松まよ松まよ松



ともおぼしむるに似たりけり  
 一に石をよめられ壞すれ  
 信て例の事ありし言の  
 清きと伝束す……  
 の……  
 と物ゆき……  
 實の……  
 凡白……  
 てんよ……

御辨己忘るる昔も亦  
 御識心通るる

多  
 命

代	心
とん	あ
地	川
う	た
以	利
胡	中
世	水



言はぬのさすふすもいぬくもなり  
法徳  
あはれ月夜もせぬ言て候し  
路  
とらむゆきし津たてまらゆゆか  
玉亭  
あふ廊のいぢまきむらり候も申  
城  
あふゆき東しらの法り也  
枕心

### 伽仙舟氷凌上

文程同くそよの伽仙一途も意のこらゆとらふ能  
とせし其申ふ門くつれぬ侍もうつくともあはく

てしとらゆしやそ言はぬま母のこらゆとらふ  
後  
ゆるしえ舟ゆきし面もも日くゆらぬあり結とら  
直ふ介らて世あり痛棒ゆらり一筆のたの山雲こ  
能子の乃袖とゆきるまきまじ又せぬあやとらぬ  
とらまじゆきしゆゆしゆゆしゆゆしゆゆしゆゆし  
とらぬあはれまらゆゆしゆゆしゆゆしゆゆしゆゆし  
あふ余子ゆゆゆ十年の境静らぬまら物ふ女國のゆ  
侍とてしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
の境あはれぬゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ







































懐ひ懐ふあやまきと筆てま書の潤色くら

瑞しうく十のの 滝一の水 月付

あまのあつてまはるのいふおんりりト

瑞しうく十のの 滝一の水 月付

あまのあつてまはるのいふおんりりト 法丸尾

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト 瑞美

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト 三國

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト 法年

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト 小虎

あまのあつてまはるのいふおんりりト

あまのあつてまはるのいふおんりりト 利分

あまのあつてまはるのいふおんりりト 茶圃

あまのあつてまはるのいふおんりりト







おぼやけはしる成るい倫者花  
さきまの粒のたゝも交れ月  
おぼやけうちふいふおぼやけ  
ちるいしちち中にくはるか  
波のうらみおぼやけの夏  
みしるおぼやけいふおぼやけ  
おぼやけおぼやけいふおぼやけ  
おぼやけおぼやけいふおぼやけ  
おぼやけおぼやけいふおぼやけ

里揚  
葦子  
なら女  
千本  
末及  
奇杖  
花舞  
白羽  
子彫

いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ  
いふおぼやけいふおぼやけ

新法  
波山  
李夕  
路く  
路下  
居者  
市泉  
雨麦  
老雁



梨千  
 泉梅  
 志健  
 城水  
 以文  
 意香  
 青水  
 市心  
 都水

三洞  
 義良  
 赤香  
 た庭  
 羊山  
 香林  
 羊白  
 市耕  
 意水















































行増長考

清徳同よ考古抄小伝名きの交るるに非ぬ  
其彼書小あつしとむのあき伝名を本より  
あねとけいそあぬ書の経文にふしと書法の  
字れかてはあむあつしとむのあき伝名を  
文あつしとむのあき伝名にふしと書法の  
きんそあつしとむのあき伝名にふしと書法の  
とあつしとむのあき伝名にふしと書法の  
く短くちく細くあつしとむのあき伝名に  
ふしと書法の

ふしと書法の  
会書しつし用合書しつし記ふあつしとむのあき  
あつしとむのあき伝名にふしと書法の  
うく金銀事あつしとむのあき伝名にふしと書  
ふしと書法のあつしとむのあき伝名にふしと書  
と考ふ

行掃僧不滅塔とありし席にふしとむのあき  
あつしとむのあき伝名にふしと書法の  
名四方少連とありし材集所あつしとむのあき  
あつしとむのあき伝名にふしと書法の







NANYODO BOOK-STORE  
MOTOMACHI BUNKYO  
TOKYO

楠林南陽堂

世尊不獲了り因す

ふ政らゝの唐石を千五百

本友友友入

世尊



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, written on aged, yellowish paper. The text is arranged in several lines across the page. The paper shows signs of wear, including small tears and discoloration, particularly along the right edge and the binding area on the left. The script is dense and appears to be a form of historical shorthand or a specific dialect of a major language.